

第六十四回神田古本まつりの收穫（下）

土屋 博

三十四「新古今和歌集新鈔」文學博士尾上八郎校訂

（富山房、昭和二年刊、正價金壹圓、本文二七四頁）

古書價格千圓也。はしがきによらば、新古今和歌集の註釋書は萬葉集、古今集に比し少けれど、最も信賴すべく平易なるものは、慶長二年に細川幽齋の筆寫したる「新古今集聞書」を基礎に寛永八年に大阪にて増補上板せられたる本書の由。たとへば、最初の歌、「見よし野は山もかすみて白雪のふりにし里に春は來にけり」については、「よしのは山ふかき所にて、外よりは春もおそくいたるべし。されども天言はずして四時行はるといへる本文の如く、かかるみ雪の中にも春の色は見え侍るなり」云々。

三十五「女子用 日本歴史地圖」東京高等師範學校教授峯岸米造編

（光風館藏版、昭和二年修正六版、定價金六拾五錢）

古書價格五百圓也。初版は明治四十一年。第一圖上古要地には、神武天皇東征路、景行天皇西征路、日本武尊東征路、赤線にて記入せらる。第二圖は、國造配置圖、三國以前の朝鮮半島圖など。第三圖は歷代帝都沿革圖。以下、第二十一圖日清日露戰役要地などまで。

三十六「史記文粹 全」簡野道明編

（明治書院、昭和四年刊、定價金九拾錢、一八八頁）

古書價格五百圓也。簡野道明例言に曰く、「龍門史記、一百三十卷、創爲紀傳體、開史家法門、上起黃帝下迄漢武獲麟之歲」云々と。

三十七「太平洋問題 一九二九年京都會議」新渡戸稻造編

（太平洋問題調査會發兌、昭和五年刊、定價金壹圓貳拾錢、三五九頁）

古書價格五百圓也。これまで新渡戸稻造に關する書籍は蒐集しつれど、本書は「幻の一冊」といふべし。開會の辭より、「孔子の教ふる所に依れば『若し爭ふ場合ありとせば、その爭や君子の爭たるべし』と云つて居ります。我等は國際精神を働かせ、公平に客觀的に何人に對しても惡意を抱くことなく、全ての人に愛の心を持ち、この大會のプログラムを遂行して行かねばなりません。百年以前ウオーズウォースは『山の靈、海の靈は自由獨立の精神を鼓吹するものだ』と歌つて居ります。今我等の周圍の山々湖水の靈は互の交誼依存を導くも

のと見ることは出来ないでせうか。ロカルノの精神はかくの如きものであり、我等は今この京都の舊都、昔その名を平安と稱へた尊き都、比叡の麓、琵琶湖の近くに相會して居るのであります」と。



三十八「最新日本著作者辭典」神谷敏夫著

(大同館發兌、昭和六年刊、正價金貳圓八拾錢、三四六頁)

古書價格八百圓也。我が國古今の著作者を一堂に會する畫期的辭典にして、收録人數は二千六百人に及び、傳記、著作、作風を詳述す。冒頭は、青木正兒(まさる)は東北大学教授の支那文學者。青木鷺水(ろすい)は江戸時代俳人。青野季吉は勞農派評論家。青山延光は水戸藩弘道館教授。青山延壽は水戸藩儒者。青山拙齋も水戸藩儒者、延光の父。末尾は、亘理章三郎東京高師教授、度忠秋、幕末の國學者。和辻哲郎京大助教授、王仁、百濟よりの歸化學者。蕨眞(わらびまこと)は歌人。

三十九「國文學者一夕話 附現代國文學者總覽」

(六文館、昭和七年刊、定價金壹圓五拾錢、本文三三三頁+附錄九七頁)

古書價格五百圓也。國文學者の輕めの隨筆集は珍し。目次をみるに、藤村作「隨筆二則」、折口信夫「鷹狩りと操り芝居と」、武田祐吉「京都にて」、麻生磯次「馬琴の隣附合」、山岸徳平「紫外線」、池田龜鑑「夏の日記から」鹽田良平「浪速なる風巻景次郎に與ふ」、佐佐木信綱「いとけなき頃」など。

佐佐木信綱曰く、「幼時の自分に對する父の教育法は、暗誦で、萬葉集の解り易い歌や、古今集や山家集のよい歌、歷代の天皇の御稱號など、種々のものを暗誦させられた。・・・旅行に行けば、道の邊の草の花が咲いていれば其の名、木が繁つていれば其の名、鳥が鳴けば鳥の名を教へられる。古戰場に到れば歴史を聞かせられる。名所に行けばその古歌を教へる。」と。

四十「學習の參考・自習の指針 小學生の國史 第五學年用」奈良女子高等師範學校訓導兼助教諭鶴井滋一・栗山芳雄共編

(日本出版社、昭和九年廿八版、定價金五拾錢、本文三三六頁)

古書價格五百圓也。目次は、第一天照大神、第二神武天皇、第三日本武尊より、第三十上杉

謙信と武田信玄、第三十一毛利元就、第三十二後奈良天皇まで。

四十一「校刻 靖獻遺言」淺井安正編輯

（觀文堂、大正五年新版、昭和十二年印刷、定價金七拾錢、五八丁）

古書價格四百圓也。淺見綱齋、近江に生れ、上京して山崎闇齋に師事。その著作「政權遺言」は皇室の衰微を歎き勤王の大義を唱へ、明治維新の因を爲せり。本書は白文のテキストなり。目次は、第一離騷懷沙賦、第二出師表、など。

四十二「萬葉集と國民性」文學博士武田祐吉著

（文部省、昭和十二年刊、七七頁）

古書價格二百五拾圓也。「日本精神叢書」の第廿六卷なり。武田祐吉曰く、「我が國民は忠君愛國の情に富み、敬神崇祖の念に篤い。その性質は公明快活であつて一致團結の美德を有して居る。しかも進取の氣風があつて、觸れる所の外國の文物を攝取消化する力を有してゐる。又一面には深く自然を愛して、その美を感受することを忘れない。これ等の性情は、又おのづから歌の上に現れて、こゝに幾多の優れたる吟詠を残して居る」と。

四十三「國語教養便覧」三澤淳晃

（大日本國語協會、昭和十二年刊、定價壹圓五拾錢、364頁）

古書價格千圓也。題言に曰く、「國語國文に關する綜合的便覽無きことを私は久しき以前より一つの不思議として感じてゐた」と。本書には、日本書紀天祖神敕、五箇條の御誓文、皇統略系圖、教育勅語、御歷代尊號、萬葉假名、有名なる和歌、俳句、字源、主なる故事成語、長歌と古事記の歌、國文學書、名數、佛教語などを收録す。

四十四「必修問題 國文要訣 增訂再版 完」傳田治朗編

（光風館藏版、昭和十六年增訂再版、定價金五拾五錢、一三八頁）

古書價格五百圓也。緒言に曰く、「高等諸學校入學試驗問題中より國文學習の基礎的重要單語を含める百三十八題を收録す」と。基礎的重要單語としては、あいなし、あかず、あからさま、あげつらふより、わりなし、をかし、をこがまし、まで。

四十五「女子綜合新國史 高等女學校上級用」東京帝國大學教授文學博士中村孝也著

（中等學校教科書株式會社、昭和十六年訂正四版、定價金八拾錢、一五一頁）

古書價格五百圓也。第一章「肇國と國體の精華」より第十三章「現代の大勢と女性の覺悟」まで。冒頭部分は、「わが大日本帝國は、上には萬世一系の天皇がおはしましてこれを統治したまひ、下には忠良無比の國民があつて皇運を扶翼しまゐらせ、天壤とともに窮り無き生命を有する國家である。その國體の鞏固にして高貴なることは、諸外國が篡奪や革命によつて、頻りに主權を取換へ、數十年若くは數百年の短い生命を以て終るのに比ぶべくもない」云々と。

四十六「忘れ得ぬ國文學者たち」伊藤正雄著

（右文書院、昭和四十八年刊、定價千二百圓、四五二頁）

古書價格三百圓也。函入。著者の伊藤正雄は、一九〇二年生れ、第三高等學校を経て、昭和二年東大國文科卒、神宮皇學館教授。「麻布中學の思ひ出」は、卒業生として興味深し。伝説の校長江原素六について、かつて明治天皇より文部大臣には江原をとのご内意ありしが、固辞して受けざりし逸話ありし由。

四十七「萬葉集發掘 考古學による萬葉解讀」原田大六著

（朝日新聞社、昭和四十八年刊、定價六百五十圓、二四八頁）

古書價格四百圓也。著者は一九一七年生れ、福岡縣立糸島中學卒、日本考古學協會員。枕詞、序詞は生きて居り、解釋すべしと主張す。「鏡成す吾が見し君を」の「鏡成す」は、葬儀の埋葬品の鏡と見るべし。

四十八「新潮日本古典集成 和漢朗詠集」

（新潮社、昭和五十八年刊、定價二千二百圓、四三九頁）

古書價格二百圓也。編者は三船の才、藤原公任、一〇四一年七十六歳にて歿。十訓抄を信ずれば、和漢朗詠集の成立は一〇一二年の由。

四十九「源氏物語繪卷の謎を讀み解く」三谷邦明・三田村雅子共著

（角川選書、平成十年刊、定價千六百圓＋税、二八二頁）

古書價格七百圓也。吹抜屋臺の技法は室内を斜め上より捉へる視點にて描かれど、國寶源氏物語繪卷にては、觀者及び登場人物の視點など、多視點的な方法採用せられたる由。

五十「ビジュアル版日本の古典に親しむ 源氏物語」圓地文子著

（世界文化社、平成十七年刊、定価千八百圓＋税、一九九頁）

古書價格七百圓也。本書の特色は、大きな文字・ルビ、見開き毎の脚注、物語の舞臺へと誘ふビジュアル紙面。

五十一「新訂 與謝野晶子歌碑めぐり」堺市編

（二瓶社、平成十九年刊、定価千二百圓＋税、二二二頁）

古書價格二百圓也。堺驛前の歌碑は、「ふるさとの潮の遠音のわが胸にひびくをおぼゆ初夏の雲」。生家跡の歌碑は、「海こひし潮の遠鳴りかぞへつゝ少女となりし父母の家」。

五十二「越中萬葉百科」高岡市萬葉歴史館編

（笠間書院、平成十九年刊、定価二千六百圓＋税、四五八頁）

古書價格五百圓也。大伴家持の越中赴任中に詠みたる歌など三三七首を収録す。卷十七の三九二七番「草枕旅育く君を幸くあれといはひへすゑつ吾が床の邊に」に始まる。

五十三「源氏物語の歌と人物」池田節子、久富木原怜、小嶋菜温子編

（翰林書房、平成二十一年刊、定価八千八百圓＋税、四六一頁）

古書價格四千圓也。第一部は主要人物別。光源氏の歌は、源氏物語の全歌數七九五首のうち二二一首を占む。紫の上は二十三首、明石の君二十二首。

第六十四回神田古本まつりの收穫（下）

土屋博

三十四「新古今和歌集新鈔」文學博士尾上八郎校訂

（富山房、昭和二年刊、正價金壹圓、本文二七四頁）

古書價格千圓也。はしがきによらば、新古今和歌集の註釋書は萬葉集、古今集に比し少けれど、最も信賴すべく平易なるものは、慶長二年に細川幽齋の筆寫したる「新古今集聞書」を基礎に寛永八年に大阪にて増補上板せられたる本書の由。たとへば、最初の歌、「見よし野は山もかすみて白雪のふりにし里に春は來にけり」については、「よしのは山ふかき所にて、外よりは春もおそくいたるべし。されども天言はずして四時行はるといへる本文の如く、かかるみ雪の中にも春の色は見え侍るなり」云々。

三十五「女子用 日本歴史地圖」東京高等師範學校教授峯岸米造編

（光風館藏版、昭和二年修正六版、定價金六拾五錢）

古書價格五百圓也。初版は明治四十一年。第一圖上古要地には、神武天皇東征路、景行天皇西征路、日本武尊東征路、赤線にて記入せらる。第二圖は、國造配置圖、三國以前の朝鮮半島圖など。第三圖は歷代帝都沿革圖。以下、第二十一圖日清日露戰役要地などまで。

三十六「史記文粹 全」簡野道明編

（明治書院、昭和四年刊、定價金九拾錢、一八八頁）

古書價格五百圓也。簡野道明例言に曰く、「龍門史記、一百三十卷、創爲紀傳體、開史家法門、上起黃帝下迄漢武獲麟之歲」云々と。

三十七「太平洋問題 一九二九年京都會議」新渡戸稻造編

（太平洋問題調查會發兌、昭和五年刊、定價金壹圓貳拾錢、三五九頁）

古書價格五百圓也。これまで新渡戸稻造に關する書籍は蒐集しつれど、本書は「幻の一冊」といふべし。開會の辭より、「孔子の教ふる所に依れば『若し爭ふ場合ありとせば、その爭や君子の爭たるべし』と云つて居ります。我等は國際精神を働かせ、公平に客觀的に何人に對しても惡意を抱くことなく、全ての人に愛の心を持ち、この大會のプログラムを遂行して行かねばなりません。百年以前ウオーズウォースは『山の靈、海の靈は自由獨立の精神を鼓吹するものだ』と歌つて居ります。今我等の周圍の山々湖水の靈は互の交誼依存を導くものと見ることは出来ないでせうか。ロカルノの精神はかくの如きものであり、我等は今この京都の舊都、昔その名を平安と稱へた尊き都、比叡の麓、琵琶湖の近くに相會して居るのであります」と。

三十八「最新日本著作者辭典」神谷敏夫著

（大同館發兌、昭和六年刊、正價金貳圓八拾錢、三四六頁）

古書價格八百圓也。我が國古今の著作者を一堂に會する畫期的辭典にして、收録人數は二千六百人に及び、傳記、著作、作風を詳述す。冒頭は、青木正兒（まさる）は東北大教授の支那文學者。青木鷺水（ろすい）は江戸時代俳人。青野季吉は勞農派評論家。青山延光は水戸藩弘道館教授。青山延壽は水戸藩儒者。青山拙齋も水戸藩儒者、延光の父。末尾は、亘理章三郎東京高師教授、度忠秋、幕末の國學者。和辻哲郎京大助教授、王仁、百濟よりの歸化學者。蕨眞（わらびまこと）は歌人。

三十九「國文學者一夕話 附現代國文學者總覽」

(六文館、昭和七年刊、定價金壹圓五拾錢、本文三二三頁＋附錄九七頁)

古書價格五百圓也。國文學者の輕めの隨筆集は珍し。目次をみるに、藤村作「隨筆二則」、折口信夫「鷹狩りと操り芝居と」、武田祐吉「京都にて」、麻生磯次「馬琴の隣附合」、山岸徳平「紫外線」、池田龜鑑「夏の日記から」鹽田良平「浪速なる風卷景次郎に與ふ」、佐佐木信綱「いとけなき頃」など。

佐佐木信綱曰く、「幼時の自分に對する父の教育法は、暗誦で、萬葉集の解り易い歌や、古今集や山家集のよい歌、歷代の天皇の御稱號など、種々のものを暗誦させられた。・・・旅行に行けば、道の邊の草の花が咲いていれば其の名、木が繁つていれば其の名、鳥が鳴けば鳥の名を教へられる。古戰場に到れば歴史を聞かせられる。名所に行けばその古歌を教はる。」と。

四十「學習の參考・自習の指針 小學生の國史 第五學年用」奈良女子高等師範學校訓導兼助教諭鶴井滋一・栗山芳雄共編

(日本出版社、昭和九年廿八版、定價金五拾錢、本文三三六頁)

古書價格五百圓也。目次は、第一天照大神、第二神武天皇、第三日本武尊より、第三十上杉謙信と武田信玄、第三十一毛利元就、第三十二後奈良天皇まで。

四十一「校刻 靖獻遺言」淺井安正編輯

(觀文堂、大正五年新版、昭和十二年印刷、定價金七拾錢、五八丁)

古書價格四百圓也。淺見綱齋、近江に生れ、上京して山崎闇齋に師事。その著作「政權遺言」は皇室の衰微を歎き勤王の大義を唱へ、明治維新の因を爲せり。本書は白文のテキストなり。目次は、第一離騷懷沙賦、第二出師表、など。

四十二「萬葉集と國民性」文學博士武田祐吉著

(文部省、昭和十二年刊、七七頁)

古書價格二百五拾圓也。「日本精神叢書」の第廿六卷なり。武田祐吉曰く、「我が國民は忠君愛國の情に富み、敬神崇祖の念に篤い。その性質は公明快活であつて一致團結の美德を有して居る。しかも進取の氣風があつて、觸れる所の外國の文物を攝取消化する力を有してゐる。又一面には深く自然を愛して、その美を感受することを忘れない。これ等の性情は、又おの

づから歌の上に現れて、こゝに幾多の優れたる吟詠を残して居る」と。

四十三「國語教養便覧」三澤淳晃

（大日本國語協会、昭和十二年刊、定價壹圓五拾錢、364頁）

古書價格千圓也。題言に曰く、「國語國文に關する綜合的便覽無きことを私は久しき以前より一つの不思議として感じてゐた」と。本書には、日本書紀天祖神敕、五箇條の御誓文、皇統略系圖、教育勅語、御歷代尊號、萬葉假名、有名なる和歌、俳句、字源、主なる故事成語、長歌と古事記の歌、國文學書、名數、佛教語などを收録す。

四十四「必修問題 國文要訣 增訂再版 完」傳田治朗編

（光風館藏版、昭和十六年增訂再版、定價金五拾五錢、一三八頁）

古書價格五百圓也。緒言に曰く、「高等諸學校入學試驗問題中より國文學習の基礎的重要單語を含める百三十八題を收録す」と。基礎的重要單語としては、あいなし、あかず、あからさま、あげつらふより、わりなし、をかし、をこがまし、まで。

四十五「女子綜合新國史 高等女學校上級用」東京帝國大學教授文學博士中村孝也著

（中等學校教科書株式會社、昭和十六年訂正四版、定價金八拾錢、一五一頁）

古書價格五百圓也。第一章「肇國と國體の精華」より第十三章「現代の大勢と女性の覺悟」まで。冒頭部分は、「わが大日本帝國は、上には萬世一系の天皇がおはしましてこれを統治したまひ、下には忠良無比の國民があつて皇運を扶翼しまゐらせ、天壤とともに窮り無き生命を有する國家である。その國體の鞏固にして高貴なることは、諸外國が篡奪や革命によつて、頻りに主権を取換へ、數十年若くは數百年の短い生命を以て終るのに比ぶべくもない」云々と。

四十六「忘れ得ぬ國文學者たち」伊藤正雄著

（右文書院、昭和四十八年刊、定價千二百圓、四五二頁）

古書價格三百圓也。函入。著者の伊藤正雄は、一九〇二年生れ、第三高等學校を経て、昭和二年東大國文科卒、神宮皇學館教授。「麻布中學の思ひ出」は、卒業生として興味深し。伝説の校長江原素六について、かつて明治天皇より文部大臣には江原をとのご内意ありしが、固辞して受けざりし逸話ありし由。

四十七「萬葉集發掘 考古學による萬葉解讀」原田大六著

（朝日新聞社、昭和四十八年刊、定價六百五十圓、二四八頁）

古書價格四百圓也。著者は一九一七年生れ、福岡縣立糸島中學卒、日本考古學協會員。枕詞、序詞は生きて居り、解釋すべしと主張す。「鏡成す吾が見し君を」の「鏡成す」は、葬儀の埋葬品の鏡と見るべし。

四十八「新潮日本古典集成 和漢朗詠集」

（新潮社、昭和五十八年刊、定價二千二百圓、四三九頁）

古書價格二百圓也。編者は三船の才、藤原公任、一〇四一年七十六歳にて歿。十訓抄を信ずれば、和漢朗詠集の成立は一〇一二年の由。

四十九「源氏物語絵巻の謎を讀み解く」三谷邦明・三田村雅子共著

（角川選書、平成十年刊、定價千六百圓＋税、二八二頁）

古書價格七百圓也。吹抜屋臺の技法は室内を斜め上より捉へる視點にて描かれど、國寶源氏物語繪卷にては、觀者及び登場人物の視點など、多視點的な方法採用せられたる由。

五十「ビジュアル版日本の古典に親しむ 源氏物語」圓地文子著

（世界文化社、平成十七年刊、定價千八百圓＋税、一九九頁）

古書價格七百圓也。本書の特色は、大きな文字・ルビ、見開き毎の脚注、物語の舞臺へと誘ふビジュアル紙面。

五十一「新訂 與謝野晶子歌碑めぐり」堺市編

（二瓶社、平成十九年刊、定價千二百圓＋税、二二二頁）

古書價格二百圓也。堺驛前の歌碑は、「ふるさとの潮の遠音のわが胸にひびくをおぼゆ初夏の雲」。生家跡の歌碑は、「海こひし潮の遠鳴りかぞへつゝ少女となりし父母の家」。

五十二「越中萬葉百科」高岡市萬葉歴史館編

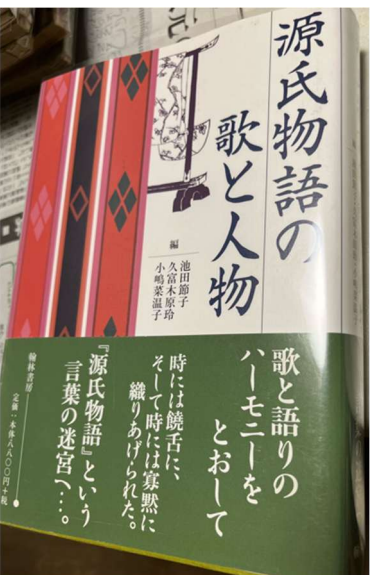
（笠間書院、平成十九年刊、定價二千六百圓＋税、四五八頁）

古書價格五百圓也。大伴家持の越中赴任中に詠みたる歌など三三七首を收録す。卷十七の三九二七番「草枕旅育く君を幸くあれといはひへすゑつ吾が床の邊に」に始まる。

五十三「源氏物語の歌と人物」池田節子、久富木原伶、小嶋菜温子編

（翰林書房、平成二十一年刊、定價八千八百圓＋税、四六一頁）

古書價格四千圓也。第一部は主要人物別。光源氏の歌は、源氏物語の全歌數七九五首のうち二二一首を占む。紫の上は二十三首、明石の君二十二首。



五十四「源氏物語の論」秋山虔著

（笠間書院、平成二十三年刊、定價三千二百圓＋税、三九五頁）

古書價格千百圓也。卷末には書評集あり、前掲書の「源氏物語の歌と人物」については、「私はこの浩瀚な本書を繙きつつ藤原俊成の『紫式部、うたよみのほどよりも、物書く筆は殊勝なり』の文言を反芻した」とあり。

五十五「遣唐使と詩歌」横田肇著

（文藝春秋企畫出版部、令和四年刊、定價千八百圓＋税、三〇九頁）

古書價格八百圓也。萬葉集の中にて唯一外國にて詠まれたる歌は、山上憶良の「いざ子ども早く日本へ大伴の御津の浜松待ち戀ひぬらむ」なる由。

（令和七年一月十一日受附）